資料〈1〉

鴨川周辺地域におけるプラナリアの分布について

―外来種と在来種の分布の変化―

京都府立桃山

氏名　公手喬太郎　佐々木はな　下川路和奏　竹田智香　田中輝　田村幸太郎　豊岡開地　日名田陽人　廣瀬正明

【キーワード】外来種、在来種、下流、上流

1. はじめに

私たちは部活動でプラナリアを飼育している。切断実験などで有名であるがその生態にはまだまだ謎があることに興味を持ち、京都周辺で採取を行った。研究対象を、同一地域におけるプラナリアの外来種と在来種の分布とし、鴨川三角デルタ・高野川・御園橋・加茂川・荒神橋で採取、種ごとに分類した。

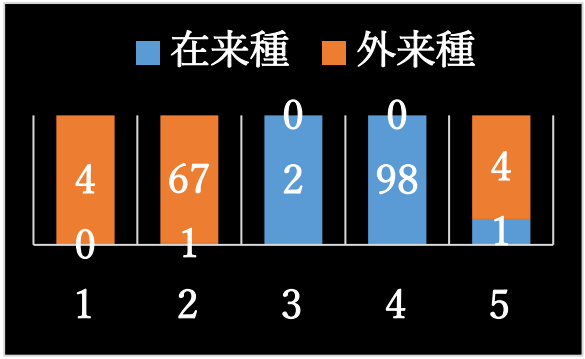
2. 目的

私たちは鴨川周辺でプラナリアの採取を行い、外来種と在来種に分類した。採取地域を鴨川周辺に絞り、９月２３日に採取を行った。そこで私たちは一つの仮説を立てた。

仮説：下流に多く外来種が生息している

３．採取の結果

	在来種(匹)	外来種(匹)	計(匹)
1, 御園橋	0	4	4
2, 加茂川	1	67	68
3, 高野川	2	0	2
4, 鴨川三角デルタ(高野川方面)	98	0	98
5, 荒神橋	1	4	5
計(匹)	102	75	177



高野川より二匹、鴨川の三角デルタより 96 匹、加茂川より 68 匹、御園橋より 4 匹、荒神橋より 5 匹採取した。採取ののち、外来種と在来種に分類した結果が左下の表とグラフである。

仮説の課題

・採取数が少なかったため正確性が欠けていた。
　➡条件をそろえた上で、一定以上の量を採取する。
・採取の範囲が正確ではなかったため生息域が絞れなかった。
　➡地図を見て範囲を決める。
・気候による変化の可能性がある。
　➡晴れの日と雨の日で分けて採取する。

４．考察

結果から十分なデータは得られなかったが、仮説は正しいとは証明できず、上流の方に外来種が多く生息していたように思う。参考文献から得たデータは 15 年ほど前のものであるため、年を経て外来種のプラナリアが環境に適応したのかもしれない。

５．まとめ

本研究では仮説は正しくないということは分かったが、生息域は特定することはできなかった。課題はまだ残っているため、さらに調査・分析を進めていきたい。

引用文献

１）「身近な動物を使った実験２」
　鈴木範男
２）「改訂　無脊椎動物採取・飼育・実験法」
　佐藤隼夫・伊藤猛夫
３）「切っても切ってもプラナリア」
　阿形清和
４）「鴨川水系におけるウズムシ種の分布と種構成」　成安高校生物